

Hudson River School 第二世代

Coleに続いた画家たち

高橋 順子

The Hudson River School という名称は1870年代に出現した Barbizon 派の風景画家たちと比較するために作られたものである。Barbizon 派の風景画が盛んになって以来1940年代に至るまで Hudson River School の作品が復活することはなかった。

1945年に19世紀風景画を中心とした展覧会が開かれたが、これは1876年の The Centennial Exposition 以来のことであった。1987年に The Metropolitan Museum of Art が ‘American Paradise: The World of the Hudson River School’ という展覧会を開催した。これはアメリカ絵画史において、風景画家たちの果たした役割の重要性を再認識したものである。1994年にも The National Museum of American Art, Smithsonian Institution が ‘Thomas Cole: Landscape into History’ 展を行い、その後 Wadsworth Atheneum (Hartford, Connecticut) と The New-York Historical Society (New York, NY) へと巡回した。このような傾向は、20世紀の high technology が支配するアメリカ社会で、先達が残した風景画が、気高く、神聖な意味をもち、また心のオアシスとして、再び評価されるようになったことを物語っている。アメリカ風景画の変遷をたどる意味でここでは、Thomas Cole 亡き後、Asher B. Durand に率いられた Hudson River School の、いわゆる第二世代といわれる画家たちについて紹介したい。

19世紀アメリカ文化の中でヨーロッパは強い引力をもっていた。それは

画家たちについても言えることで、かれらは例外なくヨーロッパへ絵画の修行に行き、イギリス、フランス、イタリア、ドイツなどに長期滞在し、現地の画家たちと親しく交わり、影響を受けている。新大陸における未到の地、ヨーロッパにはない壮大な自然に対する関心が絶頂を極めたのは1860年代で、そのあとには再びヨーロッパの影響が色濃くあらわれてくる。人の手が加えられていない雄大な自然を神聖な場所ととらえ、その風景を理想郷として描いた手法も1870年代には描きつくされた感があった。若手の画家たちによってヨーロッパからもたらされた、さらに新しい手法、すなわち自然の姿をありのままにはっきりした輪郭で描くよりも、光の効果を十分に考慮して、フランスの Barbizon 派や印象派のように、瞬間の雰囲気や loose brushwork で描き出そうとする手法が歓迎されるようになり、19世紀アメリカの風景画の style は変化していった。こうした変化にうまくのり、自分の style を変えて新しい波をリードしていった者があり、それをせず古い style を固持した者はとり残されていった。19世紀末のアメリカ風景画の世界には大きな時代の嵐が通りすぎていった。

Hudson River School の第二世代の画家たちは、Cole や Durand のような古典的手法を継承しただけでなく、彼ら自身若い時期にヨーロッパで勉強し、東部のみならず西部、中南米へも積極的に旅行し、新しい風景画を開拓していった。そしてそれぞれ強い個性をもち独自の style を確立していった。以下、代表的な画家は次のようなものである。

Asher B. Durand (1796-1886) は、Cole の親友であり、彼と同時代に活躍した画家であるので、必ずしもここで言う第二世代には入らないが、Cole (1848年肺炎がもとで急死した) のあとを受け継いで Hudson River School の代表として、その発展に尽力した。彼はニュージャージー州ジェファーソン村に生まれ、彫刻師として修行を積み、1823年 John Trumbull の作品 'The Declaration of Independence' を彫刻したことで、彫刻師と

して確固たる地位を獲得する。1820年代の終わりから1830年代のはじめにかけて、彼の関心は彫刻から油絵へと移っていった。1835年には、パトロンの Luman Reed のすすめで、完全に彫刻師としての career を終わらせ風景画家となり、Cole の死後はアメリカにおける風景画の第一人者となった。‘The Beeches’ (1845) や ‘Dover Plains, Dutches Country, New York’ (1848) などに見られるように Durand の style は Cole にくらべて、よりもの静かな落ち着いた雰囲気をもっているが、Cole に近い印象を与えるのは、Cole と同様、17世紀フランスの画家 Claude Lorrain (1600-1682) の影響を受けているからである。

Jasper F. Cropsey (1823-1900)

ニューヨーク州スタトン・アイランドに生まれた。建築家であったが、絵画にも強い関心を持ち、イギリス人の画家について絵を学んだ。1847年から2年間イタリアへ行き、その間に描いたスケッチをもとに多くの風景画を描いた。その後、ニューヨーク州の White Mountains や Hudson River Valley 周辺の風景を描くようになった。彼は Thomas Cole を敬仰していたので、彼の style には Cole の影響が多くみられる。‘Catskill Mountain House’ (1855), ‘Autmun—On the Hudson’ (1860), ‘Starrucca Viaduct, Pennsylvania’ (1865) などがその例であるが、これらの秋の風景はたいへんな人気が出て、イギリスでも高く評価された時期があった。しかしその人気は長続きせず、彼はふたたび建築の仕事で生計をたてなければならなかった。これは、彼がすでに人気の落ちていた初期の典型的な Hudson River School の style を頑なに守ったからであった。

Luminism の画家たち：

Hudson River School の画家たちのなかでも特に、湖、湿地帯、海岸など水辺の極度に強い光線を整然とした構図の中に繊細な筆遣いで描いたグル

ープがあった。John F. Kensett, Sanford R. Gifford, John W. Casilear, Martin J. Heade などである。

John F. Kensett (1816-1872)

コネチカット州チェシャイアーに生まれた。彫刻師であったが、画家を志望し、1840年ヨーロッパへ絵の修行に行き、1847年帰国後画家として名声を得た。西部へも数回旅行したが、White Mountains, Lake George, Adirondacks や東部の海岸地帯のスケッチに専念した。‘The White Mountains—Mt. Washington’ (1851), ‘View on the Hudson’ (1865), ‘Lake George’ (1869) など、古典的なバランスのよさをもった田園風景が評価された。のちにもうひとつの style がみうけられるようになった。それは、非対称的で最小限に抑制された構図である。色もほとんど単色に近く、地形を描くよりも光の効果とか雰囲気表現することに、より強い関心を示している。この期の作品として ‘Beach at Newport’ (ca. 1869-72), ‘Eaton’s Neck, Long Island’ (1872) などがある。Kensett は Hudson River School の画家たちの中で最も人々に尊敬され、敬愛された存在であったため、生涯にわたって美術館や美術学校などで多くの役職について活躍した。南北戦争中は資金募集に活躍し、1879年には Metropolitan Museum of Art の創設委員のひとりとなった。

Sanford R. Gifford (1823-1880)

ニューヨーク州グリーンフィールドに生まれた。Thomas Cole の影響を受け、Berkshires や Catskills にスケッチ旅行をし、その結果、肖像画家から風景画家となった。1856年ヨーロッパへ行き、John Ruskin (1819-1900) や Jean-François Millet (1814-1875) に会った。この旅行中、Bierstadt としばらく行動を共にしている。1868年から69年にかけて東ヨーロッパを旅行し、Jerusalem, Syria, Lebanon, Egypt へも足をのばした。1870年に

は Kensett と Whittredge と共に Colorado のロッキー山脈へ旅し、さらに Wyoming へも行った。また Alaska から California まで西海岸沿いに旅行した。南北戦争中は進んで北軍に志願し、その間は画業を中断している。彼の style は後に Luminism と呼ばれる手法で、光の広がり方を、空、水面、山の斜面に映させて、日の出、落日のある瞬間をとらえ、詩的であたたかみがある。代表作には、‘A Lake Twilight’ (1861), ‘Kauterskill Colve’ (1862), ‘Hunter Mountain, Twilight’ (1866) などがある。

John W. Casilear (1811-1893)

ニューヨークに生まれた。彫刻師として Durand の弟子となったが、後に画業に専念するようになった。Durand はその後もずっと生涯を通して Casilear の精神的な師であった。1840年に Durand, Kensett と共にヨーロッパへ行ったが、この時 Durand は彼に Claude Lorrain の作品を紹介し、Casilear はその影響を受けることになる。1858年にふたたびヨーロッパへ行き、おもにスイスに滞在した。1870年代には西部にも足をのばしている。彼の style は代表作 ‘Lake George’ (1860) にみられるように、彼の描く空は光にみち、遠景はやわらかく、光のなかへ溶けこんでゆくようで、詩的、牧歌的魅力にあふれている。美しい光の扱い方、はっきりした線描により、全体的に優雅な雰囲気をかもしだしている。

Martin J. Heade (1819-1904)

ペンシルヴァニア州ランバーヴィルに生まれた。1840年と1848年にイギリス、フランス、イタリアへ絵の修行に行った。1850年代に New York で風景画家たち、とくに Church の作品に影響を受け、自らも風景画に専念するようになった。大きく広がるパノラマのような風景を繊細な手法で描くところが彼の特徴であり、無限に続く水平線の描写などには Church の影響がみられる。南米へも 3 回旅行し、‘Brazilian Forest’ (1864), ‘View from

Fern-Tree Walk, Jamaica' (ca. 1879) などの作品と多くのスケッチを残した。彼の作品の中では1860年代から80年代にかけて、彼の絶頂期の風景画がもっとも有名で、'Approaching Storm, Beach Near Newport' (ca. 1866-67), 'Thunderstorm over Narragansett Bay' (1868), 'Newburyport Meadows' (ca. 1872-78) などがある。代表作のひとつである 'Coming Storm' (1859) では、嵐が近づいて真っ暗な遠景の入江と、まだふしぎな明るさが残っている前景の強烈な明暗のコントラストがある種の緊張感と共に神秘的なふんいきが伝わってくる。嵐のまえふれの時、嵐の去ったあとの空の模様や、不安定な光の中の風景を描いたものが多い。これが Heade が Luminist のひとりにあげられる要素である。

Frederic E. Church (1826-1900)

コネチカット州ハートフォードに生まれた。18才の時 Thomas Cole の弟子となった。1853年南米のコロンビア、エクアドルへ旅行し、これ以降彼の作風は変化した。色彩が明るく豊かになり、構図もさらに拡大し、劇的なほど大パノラマ的なものになっていった。その結果、1850年代の終わりにはアメリカでもっとも声望ある画家となった。1867年にはヨーロッパ、北アフリカ、中東、ギリシャへ長期にわたる旅行をした。Church は精密で巧みな下絵の制作と効果的な色彩の使い方に優れていた。数多い作品の中でも、1857年の 'Niagara' (108×229.9cm) や1859年の 'Heart of the Andes' (168×302.9cm) は驚異的なサイズの大きさも伴って、特に大セッションをまきおこした傑作である。彼の作品の特徴は、大胆な構図、精巧な細部の描写、他に類のないほどのスケールの大きさ、変化に富む光の描写の効果的な使い方であり、彼は19世紀アメリカ美術の全盛期を担った代表的な存在であった。しかし、1870年代以降、人々の関心が Barbizon 派や印象派に移ってゆく時代にあって、当時実用化されはじめた写真のような精密描写の Church の作品は、しだいに人気は薄れ、1900年に彼が世を

去る頃にはほとんど忘れられた存在となっていた。

西部に魅了された画家たち：

19世紀後半になって、東部とはまったく趣の異なる広大で野性的な西部の風景を描き続けた画家たちがいた。イギリス生まれの Thomas Hill (1829-1908)、同じくイギリス生まれの Thomas Moran (1837-1926)、スコットランド生まれの William Keith (1839-1911)、ドイツ生まれの Charles Wimar (1828-1862) など、同じくドイツ生まれの Albert Bierstadt も含まれている。このように全員外国生まれで、画家としての修行もさまざままで、彼らの多くは当時開拓されて間もない西部に住み着くようになった。彼らは Rocky Mountain School と呼ばれ、ロッキー山脈の雄大な自然を特に好んで描いた。ここでは、この中から Hudson River School の Bierstadt をとりあげる。

Albert Bierstadt (1830-1902)

彼はドイツで生まれ、2才の時一家でアメリカへ移住し、マサチューセッツ州ニューベッドフォードに住んだ。1853年にドイツへ絵の勉強に行った。1859年には Colorado や Wyoming へ西部の大自然をスケッチするために旅行し、1863年と1871年にもさらに奥地の西部を訪ねた。彼は Far West を絵の中にはじめて紹介した画家であった。1863年の作品 'Rocky Mountains—Landers Peak' (186.7×306.7cm) は一夜にして彼をアメリカにおける第一級の画家にしたと言われている。その他 Far West を描いた Hudson River School の画家たちには Kensett, Gifford, Whittredge がいた。彼らの成功によって、多くの画家たちが西部を描くようになった。題材や style は異なったが、Church と Bierstadt は、新大陸の大自然を描いた途方もなく大きな風景画によってアメリカのみならずヨーロッパでも好評を博した。Bierstadt の舞台背景を思わせるような作品、彼の社交性、国際性、

芸術への消えることのないエネルギーは、19世紀後半のアメリカ社会の急激な発展期を如実に反映している。彼は19世紀のアメリカの画家の中で、もっともエネルギッシュで、勤勉で、かつ国際的に高く評価されたひとりであった。しかし、彼にも Church と同じ運命が待ち受けていた。1880年以降は彼のスペクタクルな風景画の人気は落ちていった。人々の絵画に対する趣向が変わっていったのである。Bierstadt は、彼の作品にたいして人々の関心が薄れたあとも生涯精力的に制作を続けた。

Worthington Whittredge (1820-1910)

オハイオ州スプリングフィールドに生まれた。看板書きから肖像画家となり、さらに風景画家となった。1849年ヨーロッパへ行き、10年間滞在したが、Düsseldorf に長期滞在中 Bierstadt と知り合い、1857年にはローマで Gifford や Bierstadt と共同生活をした。1859年に帰国後、Kennsett, Church, Casilear など Hudson River School の画家たちおよび彼らの精神的な教師であった William Cullen Bryant (1794-1878) と親交を増した。1860年から1866年まで 'The Old Hunting Grounds' (ca. 1864) や 'Twilight on Shawangunk Mountain' (1865) など、Catskills 周辺を描いた作品が多い。1866年には Bierstadt の描くロッキー山脈の風景に触発されて西部へ行き、1870年代にも二度旅行した。この西部への旅が彼に新しい、自由な発想を与えることになった。初期の頃は、Hudson River School の一員になることに憧れ、その作風も彼らの影響をおおいに受けていたが、西部旅行以降、次第に Barbizon 的になってくる。'On the Cache La Poudre River, Colorado' (1876) や 'Second Beach, Newport' (ca. 1878-1880) にその傾向がはっきりと表れている。Whittredge はヨーロッパでの豊富な経験をもとに、自分の国の自然美を描いた画家であった。

George Inness (1825-1894)

ニューヨーク州ニューバーグに生まれた。Inness は、第二世代の中では最も重要な存在である。彫刻師として修行を積む一方、Claude Lorrain と17世紀オランダ風景画に関心を持ち、画家を志すようになった。彼は Lorrain や Gaspard Poussin (1615-1675) などヨーロッパの画家たちの作品の版画をみて、絵の勉強をした。また、Hudson River School の画家たち、特に Cole と Durand の影響を受け、‘Our Old Mill’ (1849) など彼の初期の作品には構図の取り方、牧歌的題材などにその傾向がみられる。1851年にイタリアへ行き、その帰途パリに寄り、Barbizon 派の画家 Theodore Rousseau (1812-1867) の作品に接した。1853年から54年にかけて再びヨーロッパへ行き、Rousseau とその他の Barbizon 派の画家たちの影響を受けた。1870年イタリアへ渡り、4年間滞在し、1874年帰国の途上パリに寄り、Impressionists の展覧会をみた。1884年の自作展の成功により、当代アメリカの風景画家の代表格として認められるようになった。しかし、二度目のヨーロッパ旅行から戻った Inness は Barbizon 派の影響を受けた作品を出すようになった。この時点で彼は Hudson River School の画家たちの style から離れていった。力強い、はっきりした筆遣いでていねいに自然の姿を描きだす Hudson River School の手法と違って、もっと loose で主観的な描き方に変わっていった。Inness の自然を描く姿勢は、“not for art based on nature but for art based on art”⁽¹⁾ であった。しかし、彼の作品には Hudson River School の二つの根本的要素は失われていなかった。それは、題材としては常に風景（自然）が主題であること、および自然の風景の中にこそより崇高な道徳的真実が存在するという信念であった。Inness は風景に対する考えを次のように語っている。

「高等な芸術とは、人間の感性を完璧に表現したものである。ある人は風景には人の思いを伝える力はないと思っている。しかしそれは大きな誤解である。文明の域に達した風景は特にその力を持っている。そ

れ故私は風景を好む。未開の野性的な風景より、複製画の方がさらに価値があると思う。風景にはもっと意味深いものがあるはずである。人間の行為、労働、努力、苦しみ、欲望、不安、貧困、愛情などはそれぞれ存在したことのあるところに表現されるべきである。』⁽²⁾

ここには明白に彼の風景画に関する姿勢が従来の Hudson River School の考えと異なることが表わされている。Hudson River School の作風は人類未到の荘厳な大自然を描き、その中に何か神聖なものの存在を求めるというものであったが、Barbizon 派の style は“人のいる風景”であった。それは“人の生活のある風景”で、そこには人類未到の部分はすでになかった。その代わり、それは人間性を追求し、人間性にあふれるものであった。Inness の1860年の作品 ‘Clearing Up’ には、彼の新しい style がよく表現されている。細部をあまり詳しく描かず、線も loose で全体の雰囲気的重要性を置き、多くの人物が描かれている。働いている人たち、切り倒された大木、石の橋、遠くの教会の塔、家の屋根など、自然の中に溶けこんで、自然と共存してゆく人々の姿と生活が描き出されている。Inness はこういう題材を追うことに、絵を描く意義を見出していったに違いない。これはまたアメリカがこの時期になってようやくヨーロッパの水準に追いついていったことを意味するものであった。

1876年に Philadelphia で開かれた Centennial Exposition は、Hudson River School の終焉を告げるものであった。ここでも風景画は出展作の大部分を占め、多くの賞を獲得した。特に Sanford R. Gifford はほとんどの賞を独占した。しかし、ここに出品された風景画は従来とは異なった風景画であった。それは、フランスの Barbizon 派や印象派の影響を反映したものであった。それぞれの artist の自然への主観的な感覚をキャンバスに表現したもので、忠実に細部を描きだす手法に代って、もっとおおざっぱで

簡素化されていた。Inness は自身の style の変化について次のように語っている。

「絵の中の細部は画家が再現しようとする対象の印象を絵にするためにのみ丹念に仕上げられるべきである。それ以上細部描写にこだわると、その印象は薄れるか、消失してしまい、ただ単に外面的なものを並べただけということになってしまう。そういう作品は非常に realistic に見えるかもしれないが、しかし、芸術作品とはならないのである。」⁽³⁾

このあと、Barbizon 派や印象派の手法を自分の style に取り入れることによってさらに評価を得ていったのは、Inness の他に、Alexander Wyant (1836-1892)、Whittredge、らであった。彼らはまた友人同志でしばしば一緒に仕事をした。

半世紀にわたって、Cole, Durand から Kensett, Church, Bierstadt へと引きつがれ、19世紀アメリカの画壇をリードしてきた Hudson River School の style は、1876年の The Centennial Exposition において完全に幕をおろした。それ故、この School の時代は、Cole が見出された1825年から、この Exposition の前年の1875年までとされている。

註：

- (1) O'Neill, John P., ed., *American Paradise—The World of the Hudson River School*, The Metropolitan Museum of Art, NY, 1987. p. 233.
- (2) Ibid., p. 236.
- (3) Minks, Louise, *The Hudson River School*, Crescent Books, NY, 1989. p. 84.

参考文献：

- Boehme, Sarah E. and Fees, Paul, *Frontier America*, The Buffalo Bill Historical Center, NY, 1988.
- Champa, Kermit, *The Rise of Landscape Painting in France—Corot to Monet*, The Currier Gallery of Art, Manchester, NH, 1991.
- Eliot, Alexander, *Three Hundred Years of American Painting*, TIME Inc., NY, 1957.
- Miller, Angela, *The Empire of the Eye*, Cornell University Press, Ithaca, NY, 1993.
- Minks, Louise, *The Hudson River School*, Crescent Books, NY, 1989.
- O'Neill, John P., ed., *American Paradise - The World of the Hudson River School*, The Metropolitan Museum of Art, NY, 1987.
- Robotham, Tom, *Albert Bierstadt*, Crescent Books, NY, 1993.
- Wilmerding, John, *American Views—Essays on American Art*, Princeton University Press, NJ, 1991.